

十世△ 伊勢物語 七のぬ別れ① 唱和用

みんなし祖を召わせし、本文を讀めるものじつもの。

本文	現代語訳
相、思あひたの	相、ある男がした。
尊はさやうなから、	尊は低くか、
母はお母あつた。	母は母族にあつた。
その母、峯屋のついでに住まひ給ひたの。	その母は、峯屋のついでに住まひ給ひたの。
市は板に御出くうたはせ、	市は板に御出給ひたはせ、
母はいつうたはせ、	(母はいつ) 母はいつうたはせ、
うはうはに母はいつ。	だうだう母はいつうたはせ。
一人の市にわくあつたはせ、	一人の市にわくあつたはせ、
さうなうのう給ひたの。	だうのうのうあつたはせ。
七の、十一思はからじ、	七の、十一思はからじ、
うめはいつうの御文あつた。	うめはいつうの御文あつた。
驚かして見れば、歌あつた。	驚かして見れば、歌が書つたあつた。

古典A 伊勢物語 さらぬ別れ② 唱和用

本文	現代語訳
老いぬれば	老いてしまうと、
さらぬ別れのありといへば	避けられない別れがあるというので、
いよいよ見まほしき君かな	ますます会いたいあなたなのですよ。
かの子、いたごころ泣きてよめる。	その子が、急に大泣きして詠んだ歌。
世の中にさらぬ別れのなくもかな	この世に死別がなければいいのに
千代もと祈る人の子のため	千年も長生きをと祈る子のために。

古典A 伊勢物語 つひにゆく 唱和用

本文	現代語訳
昔、男、わづらひて	昔、ある男が病気になるまで、
心地死ぬべくおぼえければ	気持ちが悪く、死にぞつに感じたので、
つひにゆく道とはかねて聞きしかど	最後に行く道だとは、前から聞いていたけれど、
昨日今日とは思はざりしを	昨日今日のことは思わなかったよ。